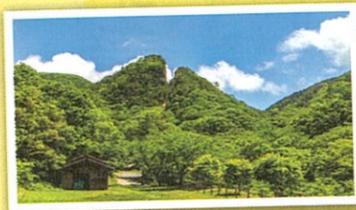




My Favorite
マイ・フェイバリット



佐渡金山

小学生の時、金山のもつ華やかさの裏に、強制労働の実態があったり、労働環境が過酷であったことを知り衝撃を受けました。「いのちの尊厳とは？」といったことが、その時に私の課題になったのだと思います。



崎陽軒のシューマイ弁当

シューマイといえば、コレ！お土産のイメージが強いですが、私の場合、日常の食卓によく並びます。毎週金曜日、横浜の精華学園高等学校に出席する際は、シューマイ弁当は必ず食べています(写真は期間限定版)。



東本願寺・同朋会館

生きていると、色んなつらいことがありますよね。同朋会館に行くよ、つらみや現実とは変わらぬのですが、頭が下がる世界に出会えるというか。力をもらえる大好きなところです。

「アトリエSOLスクール」では出張ワークショップも開催
右：横浜私立柏幼稚園園長さんと月1回のアートの時間。「園庭の樹木を観察してから思い思いの素材を使って表現。身体を使うことを大事にしています」(談)



左：横浜市老人福祉施設「デイサービスひなた」にて、認知予防にフルイドアートワークショップ。「指を使うこと、色を決めることは脳を活性化させます。小さな段差に躓(つまづ)きにくなったり、失敗はない表現の選択が喜びにつながっているようです」(談)



伊藤さんの作品
左：最新作の「孔雀寿」
右：「無量寿」の対の作品「無量華」。「学生時代に描きました。子どもの頃から一緒に育った雑種犬「コロ」の最期を看取った思い出が私の初めての「死」との直面でした。庭に咲く彼岸花に命がつながって、命の灯火が私の中で咲き続けています」(談)



おばあさん
あなたの
となりの
僧侶
第88回

孔雀(鳳凰)を描いた伊藤さんの作品「無量寿」。2023年に東本願寺に寄贈し、現在、東本願寺・同朋会館の講堂に飾られている

アトリエSOLスクール主宰の
日本画家



今月紹介する僧侶は…
伊藤はるか
新潟県佐渡市
真宗大谷派萬照寺 衆徒

絵画制作を通して
自己肯定感をもってほしい

日本画家で真宗大谷派僧侶の伊藤はるかさんは、母親が生まれ育った萬照寺(新潟県佐渡市)に僧籍を置き、居住する横浜市で「アトリエSOLスクール」を主宰しています。

クレヨンと絵の具を使つてのびのびとお絵描きを楽しむアトリエコース(幼稚園児〜小学生)から、鉛筆デッサン・水彩画・絵手紙など多様な表現方法にチャレンジする表現・フリークラス(小学生〜大人)、工作や造形、美術高校・大学受験対策、アートセラピーなど、さまざまなコースを開設しています。

「創作したいという思いは人間の本来的な欲求です。自分の体を使つて何かを表現すること、素直にそれを表現できることは非常に大切なこと」と、はつらつと話す伊藤さん。「絵画制作を通して、

絵に間違いはない
どんな表現もいいんだよ

幼心にそんな思いを抱いていた伊藤さん。大学の芸術学科で日本画コースを専攻し、在学中、交換留学生としてロンドン大学でファインアートを学びます。帰国後、さまざまな経験をを経て、アトリエスクールを開くのですが、きっかけは小学2年生の息子さんの不登校でした。

「色々思い詰めることがあって、東本願寺・同朋会館(宿泊研修施設)の奉仕団に参加しました」。そこで門徒さんと共に手を合わせて語らう中で、理想の母親像に縛られていた自身に気づいたという伊藤さん。「不登校であっても、自分自身でいいんだとどうすれば伝えられるのか。自己肯定感を高める表現教育とは

どんな人も自己肯定感をもって、お互いを認め合い、安心して交流できる場をめざしています」。

小さい頃から絵を描くのが好きだった伊藤さん。父親が生まれ育ったお寺(真宗佛光寺派)の本堂や庫裡には、日本画家・平山郁夫先生のリトグラフなどが飾っており、それらに魅入っていたとか。また、本堂の内陣の荘厳や、僧侶の衣の装飾にも惹かれていた、と言います。「本堂の内陣には何が描いてあるの?」と父親に聞くと「お浄土だよ」って。本堂には「深き命に目覚め、一切を拜める人になろう」という標語が書いて貼ってあって、小さい頃から、「お浄土ってなんだらう、命ってなんだらう、生きていくってなんだらう?」と考えたりしながら絵を描いているような子でした」。

何か」を知りたい思いで大学院に進学。教育学の学びを経て、アトリエスクールを立ち上げたそうです。

「子どもたちの躓きつつ、関わる大人たちの問題でもあるんですね。多様な子どもたちをどれだけ受けとめていけるか、受けとめるために大事なことは何か。生きていたら失敗することだってあるけれど、あなたの命も、目の前の小さな命もほんとうに尊い、深き命を生きている。それが分かっている方がいいんじゃないか。生活の中でそうしたことを伝えたいという思いが活動の根幹にあります。絵って間違いはないんですよ。どんな表現もいい。誰もが自分に花マルをあげて生きていける、命終えていけるような、そういう教育を、絵画活動を通して実践していきたいです」。